様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０３６１

研究課題名（和文）プルータルコス作品の実証的研究：文化・思想的背景に即した総合的再検討

研究課題名（英文）Studies in Plutarch's Works: A General Reappraisal with Emphasis on Their Cultural and Intellectual Background

研究代表者
小池　登（Noboru, Koike）

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：１０５０７８０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：プルータルコスの作品は西洋古典の中でも特に世に広く親しまれ、学術上の重要性も高いにもかかわらず、国内の専門研究が殆ど進んでいなかった。本研究は哲学・史学・文学の３分野が緊密に連携する共同研究として、文献学的に精密な読解に基づきつつ同時代的背景と作品の連関の諸相を分析し、古典古代の中・長期的観点からその位置づけを再検討することで、作品の特質と意義を明らかにすることを目指した。各研究者による多彩な個別成果が雑誌論文・学会発表・図書の形で公表され、３分野共同の成果報告が日本西洋古典学会第66回大会および『西洋古典学研究』64号で行われた。加えてこれらを発展させた成果を含む図書の刊行準備が開始された。

研究成果の概要（英文）：There was a dearth of specialized study of Plutarch's works in this country, despite their general popularity and academic importance. Hence this research project was organized to elucidate the characteristics and significance of the Plutarchan opera: special emphasis was placed on the cooperation of philosophical, historical, and literary specialities, the combination of philologically minute reading and broad survey of the historical milieu, along with the reassessment of the oeuvre in the medium and long term perspective of classical antiquity. The project members produced manifold output in the form of articles, conference papers, and books; the fruit of the cooperative efforts was presented at the 66th Annual General Meetings of the Classical Society of Japan and the 64th issue of the Journal of Classical Studies; moreover, publication of further outcome is forthcoming.

研究分野：西洋古典学

キーワード：プルータルコス　西洋古典　西洋古代史　古代哲学　古代ギリシャ　古代ローマ

１．研究開始当初の背景

プルータルコス（紀元後 50 年以前～120 年頃）の作品は、西洋古典作品の中でも近代ヨーロッパ文化に最も影響を与えたものの一つである。シェークスピアやモンテーニュ等、直接的影響を受けた作家は枚挙にいとまがない。我が国においても認知度は高く、特に広く読まれているものの一つと言える。加えて学術上の重要性も大きい。広範な関心から大量の著作を残したこの作家は、残存資料の限られる西洋古典学研究においては、あらゆる専門分野にとって貴重な（往々にして唯一の）証言を伝えるものである。古典古代に何らかの関わりのある研究分野でその恩恵に浴していないものはない、とまで言われるゆえんである。

しかしながらこの作家を主題とする専門研究となると、本研究の開始以前、国内ではほとんど進んでいなかった。研究の欠如の原因としては、従来国内のギリシャ研究が古典期（前５～４世紀）および前古典期（前６世紀以前）に偏りがちであったことも挙げられようが、それ以上に作品の膨大さ、内容・形式の多様性が指摘できる。広範な関心から著された大量の作品（周知のとおりプルータルコスの作品は『英雄伝（対比列伝）』および『モーラーリア』の名で呼ばれるが、これは実際には双方合わせて 100 を越える作品の総称である）は、その内容が伝記のみならず哲学、政治、修辞学、文芸批評、自然科学その他と多岐に渡り、形式としても伝記、論考、対話、書簡等、各種の文芸形式が用いられる。この多量・多様性は、一研究者の単一の視点に基づく研究開始を困難にする。しかし国内の状況とは対照的に、近年欧米ではこの作家に対する再評価の気運が高まっており、その中でプルータルコス作品の理解においてローマ帝政下のギリシャ世界の知的環境、あるいは同時代の政治的・文化的背景を視野に入れ直す必要が強調され始めており、国内の研究欠如が際立ちつつあった。

このような背景のもと本研究は、この作家がおよそ一研究者、一分野からのアプローチで捉えられるべきものではなく、哲学・史学・文学の共同研究がまずもって必要とされる作家であり、特にその作品理解のためには作家の置かれた知的環境あるいは同時代の文化・思想的背景に即した総合的な再検討が必要となるとの企図をもって開始された。

２．研究の目的

前述のような背景のもとで開始された本研究は、文献学的な基礎作業に基づいた実証的な読解と、哲学・史学・文学が緊密に連携する共同研究によって、同時代的背景と作品の連関の諸相を分析し、古典古代の中・長期的観点から作家の位置づけを再検討することで、プルータルコス作品の特質と意義を実証的に明らかにすることを目的としている。

そして３年間の研究期間内で一定の成果を得るために、特に以下の知見を得ることを目標とした。すなわち近年、欧米において隆盛を見せているプルータルコス研究について積極的に先行研究の蒐集と分析を行い、文献学的な基礎作業に基づいてプルータルコスの作品『英雄伝』と『モーラーリア』の実証的な読解を進め、哲学・史学・文学の総合的観点に基づいて再検討を加えることである。その際は、まず３分野それぞれにおいて作品と同時代的背景の連関について分析し、また古典古代全体の中・長期的観点から作家の位置づけを再評価する。かつそれぞれの分野が得た知見を分野総合的な視点で見直し、相互の関連性、連動する側面について検討を加える。このようにして、文化・思想的背景に即した総合的な再検討を基盤に、プルータルコス作品の特質と意義を実証的に明らかにすることが、本研究の目的である。ただし、膨大な作品を扱うことによる研究の散漫を回避すべく、まずは『英雄伝』を焦点とする研究に着手する。ただしこれは当初から『モーラーリア』との関係性を検討することを排除するものではなく、また研究の進捗に応じて対象を拡大することとした。

３．研究の方法

全体的な方針としては、まず哲学・史学・文学の共同研究による総合的再検討を実現するために、３分野のそれぞれに複数の研究者を配置して各人に同時代背景ならびに中・長期的視点に着眼した課題を設定し個別研究を進めることとし、哲学に瀬口と木原、史学に松原と佐藤、文学に小池、平山、中谷が配置された。ここで各分野に複数名が配置されていることは重要である。相互批判によって研究の客観性がより高い水準で達成されることが期待されるだけでなく、不測の事態に対して相互補完をもって対処することが可能となるからである。

加えて３分野が緊密に連携する共同研究を実現するために、毎年度複数回の定例研究会を開催する。ここでは原則として研究組織の全員が集まり、進捗報告、情報交換、問題提起、相互批判や、個別成果の総合・集約等を行う。また研究組織の構成員が国内各地に分布しているため、各研究者がそれぞれの研究環境において得た情報・知見を地域的分布を越えて共有する場ともする。加えて、各種学会・研究会の場や電子メールによる意見交換を通じて、平生から緊密な連携を心がけることとした。

具体的な作業としては、まず第一に文献学的な基礎作業に基づいて作品の精緻な読解を進めつつ、関連する先行研究の調査・概観を行うことである。いずれにおいても、国内で必ずしも整備の進んでいない諸資料について積極的に蒐集をおこなうことから始めなければならない。それと並行して、プルータルコス作品の研究上の諸問題について、哲学・史学・文学それぞれの観点から検討を行

う。加えて、特に文献学的作業に基づいてプルータルコス作品の精緻な読解を進める際には、写本伝承や原典校訂上の諸問題を検討するだけでなく、周辺ジャンルの諸作品との比較・対照も必要となる。ただし研究の散漫を回避すべく、初年度は特に『英雄伝』を焦点とすることとし、一定の見通しが得られた段階で『モーラーリア』も検討対象に加えることとした。

個別の研究成果は雑誌論文・口頭発表・図書その他の形で随時公表してゆく。研究の第２年度に全国学会で３分野共同による成果報告を行う。そして最終的な研究成果を論集の形にまとめて公表することとした。

４．研究成果

（１）３年の研究期間で各研究者はそれぞれ定められた課題に沿って個別研究を進め、その過程で「５．主な発表論文等」に示すように多岐に渡る研究成果を公表することができた。ここに見られる多様性は、プルータルコスという作家がいかに広範な専門分野に関連するかを示すと同時に、この作家を研究対象とする際にいかに多様な専門的知見の集約が必要となるかを明らかにしていると言えよう。

（２）定例研究会を次の通り開催した：2014 年 6 月 7 日（京都女子大学）、2014 年 8 月 22 日（首都大学東京）、2014 年 12 月 26 日（神戸大学）、2015 年 5 月 9 日（首都大学東京）、2015 年 8 月 11 日（神戸大学）、2015 年 12 月 5 日（國學院大學）、2016 年 6 月 4 日（大阪大学）、2016 年 9 月 19 日（慶應義塾大学）、2017 年 3 月 5 日（首都大学東京）。いずれも急病等のやむを得ない場合を別として研究組織の全員が集まり、個別成果の相互批判と総合・集約等を行った。加えて 2015 年 12 月からは研究組織外から哲学・史学・文学それぞれ１名の研究者を招聘し、研究の客観性の向上を図った。

（３）哲学・史学・文学の３分野共同による研究成果として、日本西洋古典学会第 66 回大会・シンポジウム「プルータルコスと指導者像」（2015 年 6 月 6 日、首都大学東京）の場で報告を行い、また『西洋古典学研究』64 号（2016 年）に研究組織の全員が論文を掲載した。

（４）研究の具体的な成果は多岐に渡るが、中でも本研究を通じてプルータルコス作品について新たな作家・作品像を得るに至ったと考えている。すなわち文学的に創造性が乏しく、思想的深みに欠け、歴史情報の信憑性が疑わしい伝記作家といった従来しばしば見られた低評価に反して、とりわけ注目すべきは、①この作家が過去の哲学・史学・文学の諸作品によく通じ、哲学思想や文学ジャンルといった西洋古典世界の知的伝統を積極的に取捨選択しながら活用していること、②その作品は帝政ローマ下のギリシャという同時代の歴史状況を考慮しつつそれに応えるかたちで書かれていること、③新たな文学ジャンル、表現形式を切り開こうと模索がそこには確認できること、という３点である。言い換えれば伝統を継承・活用しつつ、時代状況を顧慮し、そのなかから新機軸を求める革新性こそが、今まで見過ごされていた作家・作品像である。

（５）上述の新たな作家・作品像とともに本研究の総合的な成果を含む図書の刊行準備が開始された。各研究者は担当箇所の執筆に既に着手しており、具体的な出版社との交渉も始められた。

（６）先に「１．研究開始当初の背景」にも述べたとおり古典古代を対象とするあらゆる研究にとって、プルータルコスは避けて通れぬ重要な情報源であり、その作品について得られる新たな知見は、これら諸研究に対しても重要な貢献となることが期待される。また世に広く親しまれているこの作家について得られる新たな知見は、同作家の影響が色濃い近世・近代の思想研究、文学研究のみならず、広く日本の社会・国民に対しても知的刺激を提供することができるものと期待される。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　23　件）

1. 平山晃司、「ヘーシオドス『仕事と日』における dikê について」、『言語文化の比較と交流』3 号（2016 年）、39-45 頁、査読なし、DOI: 10.18910/57371。
2. 木原志乃、「アリストテレスの医学的構想：実践知に基づいた医術の方法論」『國學院雑誌』117(6)号（2016 年）、1-12 頁、査読あり。
3. 佐藤昇、「前 4 世紀アテーナイの法廷と修辞」、『西洋史研究』新輯 45 号（2016 年）126-137 頁、査読あり。
4. 佐藤昇、柏達己「ヒュペレイデース新断片」、『クリオ』30 号（2016 年）、81-99 頁、査読なし。
5. 小池登、「シンポジウム「プルータルコスと指導者像」：趣旨と総括」、『西洋古典学研究』64 号（2016 年）、89-91 頁、査読あり。
6. 瀬口昌久、「プルタルコスの指導者像と哲人統治の思想」、『西洋古典学研究』64 号（2016 年）、91-101 頁、査読あり。
7. 木原志乃、「瀬口報告へのコメント」、『西洋古典学研究』64 号（2016 年）、101-103 頁、査読あり。
8. 松原俊文、「プルタルコス『英雄伝』のコンテクスト」、『西洋古典学研究』64 号（2016 年）、103-114 頁、査読あり。
9. 佐藤昇、「松原報告へのコメント」、『西洋古典学研究』64 号（2016 年）、114-116 頁、査読あり。
10. 中谷彩一郎、「『対比列伝』におけるプル

ータルコスの「比較」と人物描写」、『西洋古典学研究』64 号（2016 年）、116-126 頁、査読あり。
11. 平山晃司、「中谷報告へのコメント」、『西洋古典学研究』64 号（2016 年）、126-128 頁、査読あり。
12. Toshibumi MATSUBARA, ‘Out of Many, One? An Aspect of the Public Role of Roman Historiography’, *KODAI: Journal of Ancient History* 16 (2015), 91-142. 査読あり。
13. 平山晃司、「ストラッティス断片訳注余滴」、『言語文化共同研究プロジェクト 2014 言語文化の比較と交流』2 号（2015 年）、39-45 頁、査読なし。
14. Noboru SATO, ‘Out-of-Court Settlement and Public Opinion in Democratic Athens’, *KODAI: Journal of Ancient History* 16 (2015), 43-56. 査読あり。
15. 中谷彩一郎、「コランセとルソーの『ダフニスとクロエ』」、『鹿児島県立短期大学人文学会論集『人文』』39 号（2015 年）、41-52 頁、査読なし。
16. 瀬口昌久、「宇宙の造り手とは何か――プラトンのコスモロジーのなかのデーミウールゴス」、『ギリシャ哲学セミナー論集』12 号号（2015 年）、18-32 頁、査読なし。
17. 木原志乃、「古代ギリシア初期医学に見る魂と身体の相関性の問題――De victu とプラトン哲学」、『人文学論集』33 号（2015 年）、11-27 頁、査読なし。
18. 木原志乃、（書評）「J. Jouanna, *Greek Medicine from Hippocrates to Galen: Selected Papers*. Leiden/Boston, 2012」、『西洋古典学研究』63 号（2015 年）、149-152 頁、査読なし。
19. 平山晃司、「古代ギリシアの法における刑罰としての呪い」、『言語文化の比較と交流（言語文化共同研究プロジェクト 2013）』1 号（2014 年）、51-59 頁、査読なし。
20. デボラ・ボーデカー、佐藤昇（翻訳）、「歴史家と／としての初期ギリシアの詩人」、『クリオ』28 号（2014 年）、86-103 頁、査読なし。
21. 中谷彩一郎、「ピエール・ロジョン『ダフニスとクロエー』の三種の台本について」、『鹿児島県立短期大学地域研究所『研究年報』』45 号（2014 年）、53-69 頁、査読なし。
22. 中谷彩一郎、「矢野目源一譯『ダフニスとクロエ』」、『鹿児島県立短期大学人文学会論集『人文』』38 号（2014 年）、9-24 頁、査読なし。
23. 木原志乃、「医学の祖ヒッポクラテスと患者の予後の洞察」、『環境と健康』27-2 号（2014 年）、150-160 頁、査読なし。

〔学会発表〕（計　16　件）
1. 小池登、「アイスキュロス『ペルサイ』93-101 行について」、東京都立大学哲学会第 40 回研究発表大会、2016 年 7 月 9 日、首都大学東京（東京都・八王子市）。
2. Noboru SATO, ‘Rhetorical Functions of Thorubos in Forensic Narratives’, The 9th Celtic conference in Classics, 2016.6.23, University College Dublin: Dublin (Ireland).
3. Noboru SATO, ‘Hellenistic Didyma and the Milesian Mythical Past’, Asia Minor Workshop, 2016 年 3 月 20 日、京都大学（京都府・京都市）。
4. 佐藤昇、「前４世紀アテーナイの法廷と修辞」、2015 年度西洋史研究会大会シンポジウム共通論題「歴史とレトリック―古代地中海世界における虚構・真実・説得―」、2015 年 11 月 15 日、立教大学（東京都・豊島区）。
5. 佐藤昇、「古典期アテーナイの養子縁組：家産と社会への影響に関する一考察」、古代ギリシア文化研究所 2015 年度年次総会・研究会、2015 年 11 月 14 日、東京大学（東京都・文京区）。
6. Saiichiro NAKATANI, ‘The Sound of Waves Revisited’, The 5th International Conference on the Ancient Novel, 2015.10.2, Hyatt Regency Houston, US。
7. 小池登、「総論・趣旨説明」、日本西洋古典学会第 66 回大会・シンポジウム「プルータルコスと指導者像」、2015 年 6 月 6 日、首都大学東京（東京都・八王子市）。
8. 瀬口昌久、「プルタルコスの指導者像と哲人統治の思想」、日本西洋古典学会第 66 回大会・シンポジウム「プルータルコスと指導者像」、2015 年 6 月 6 日、首都大学東京（東京都・八王子市）。
9. 松原俊文、「『英雄伝』のコンテクスト」、日本西洋古典学会第 66 回大会・シンポジウム「プルータルコスと指導者像」、2015 年 6 月 6 日、首都大学東京（東京都・八王子市）。
10. 中谷彩一郎、「『対比列伝』におけるプルータルコスの「比較」と人物描写」、日本西洋古典学会第 66 回大会・シンポジウム「プルータルコスと指導者像」、2015 年 6 月 6 日、首都大学東京（東京都・八王子市）。
11. 木原志乃、「第 10 回国際プルータルコス会議参加報告」、日本西洋古典学会第 66 回大会・シンポジウム「プルータルコスと指導者像」、2015 年 6 月 6 日、首都大学東京（東京都・八王子市）。
12. 木原志乃、「瀬口報告へのコメント」、日本西洋古典学会第 66 回大会・シンポジウム「プルータルコスと指導者像」、2015 年 6 月 6 日、首都大学東京（東京都・八王子市）。
13. 佐藤昇、「松原報告へのコメント」、日本西洋古典学会第 66 回大会・シンポジウム「プルータルコスと指導者像」、2015 年 6 月 6 日、首都大学東京（東京都・八王子市）。
14. 平山晃司、「中谷報告へのコメント」、日本西洋古典学会第 66 回大会・シンポジウム「プルータルコスと指導者像」、2015 年 6 月 6 日、首都大学東京（東京都・八王子市）。
15. Noboru SATO, ‘The Athenian adoption and the adoptee’s paternal household’, International Conference: Aspects of family law in the ancient world ― a cross-cultural perspective, 2015.4.23, University College London, UK。

16. 瀬口昌久、「宇宙の造り手とは何か――プラトンのコスモロジーのなかのデーミウールゴス」、ギリシャ哲学セミナー、2014 年 9 月 13 日、立正大学（東京都・品川区）。

〔図書〕（計　9　件）

1. Marilia P. Futre Pinheiro, David Konstan, Bruce D. MacQueen (eds.), Saiichiro Nakatani (et al.), *Cultural Crossroads in the Ancient Novel*, De Gruyter, forthcoming.
2. 篠田知和基、丸山顯德（編）、青江智洋、青木健、平山晃司（他）（著）、『世界神話伝説大事典』、勉誠出版、2016 年、1039 頁（平山晃司担当箇所：417-418、419-420 頁、他、計 25 項目）。
3. 小田中直樹、帆刈浩之、佐藤昇、千葉敏行、池田嘉郎、上野雅由樹『世界史／いま、ここから』山川出版社、2017 年、352 頁（佐藤昇担当箇所：12-44 頁）。
4. アリストテレス（著）、土橋茂樹、瀬口昌久、和泉ちえ、村上正治（訳注・解説）、『アリストテレス全集 12：小論考集』、岩波書店、2015 年、ii+431+26 頁（瀬口昌久担当箇所：161-246, 393-405 頁）。
5. Nick Fisher and Hans van Wees (eds.), Alain Duplouy, Guy Bradley, Laurens E. Tacoma, Antoine Pierrot, Stephen Lambert, Noboru Sato, Nick Fisher, Olivier Mariaud, James Whitley, Thomas J. Figueira, Gillian Shepherd, *Aristocracy in Antiquity: Redefining Greek and Roman Elites*, The Classical Press of Wales, 2015, pp. 390. （Noboru Sato 担当箇所：203-226 頁）
6. 近藤和彦（編著）、佐藤昇、千葉敏之、加藤玄、小山哲、後藤はる美、天野知恵子、伊東剛史、勝田俊輔、西山暁義、平野千果子、池田嘉郎（著）、『ヨーロッパ史講義』、山川出版社、2015 年、243 頁（佐藤昇担当箇所：9-31）。
7. 小池和子、上野慎也、兼利琢也、小池登、小林薫、『伝サッルスティウス他　サッルスティウス関連小品集（翻訳・注・解説）：付、ロナルド・サイム『ローマ革命』原典箇所索引』、慶應義塾大学言語文化研究所、2015 年、iii+131 頁（小池登担当箇所：17-33 頁）。
8. 内山勝利（編著）、瀬口昌久（著）（他）、『プラトンを学ぶ人のために』、世界思想社、2014 年、xi+284+xii 頁（瀬口昌久担当箇所：191-209 頁）。
9. 藤澤令夫（著）、内山勝利（編）、瀬口昌久（編）、中畑正志（編）、『プラトンの認識論とコスモロジー――人間の世界解 釈史を省みて』、岩波書店、2014 年、xvi+402+18 頁（瀬口昌久執筆部分：373-386 頁）。

６．研究組織

(1)研究代表者

小池　登（KOIKE, Noboru）
首都大学東京・人文科学研究科・准教授
研究者番号：10507809

(2)研究分担者

瀬口　昌久（SEGUCHI, Masahisa）
名古屋工業大学・工学研究科・教授
研究者番号：40262943

松原　俊文（MATSUBARA, Toshibumi）
東洋大学・人間科学総合研究所・客員研究員
研究者番号：60645951

平山　晃司（HIRAYAMA, Koji）
大阪大学・言語文化研究科（言語文化専攻）・准教授
研究者番号：30581095

佐藤　昇（SATO, Noboru）
神戸大学・人文学研究科・准教授
研究者番号：50548667

中谷　彩一郎（NAKATANI, Saiichiro）
慶應義塾大学・文学部・准教授
研究者番号：30527883

木原　志乃（KIHARA, Shino）
國學院大學・文学部・教授
研究者番号：10407166